週刊 武四郎

第40号
2019年（平成31年）1月9日（水）
発行・松阪市

●毎月第二週は、
松浦武四郎と北海道に
ついてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

サッ・ポロ・ペツ

現在の北海道の中心地札幌の語源はアイヌ語の〈サッ（乾いた）・ポロ（大きな）・ペツ（川）〉に由来するといいます。

武四郎さんは、早くからその広大な原野、〈サッ・ポロ・ペツ〉に注目していました。

「ツイシカリ川（豊平川）三里を上り、札幌の辺りぞ大府を置くの地なるべし。此の札幌に府を置玉はば、石狩は不日にして大坂の繁盛を得べく、十里遡り津石狩（江別市対雁）は伏見に等しき地となり……」

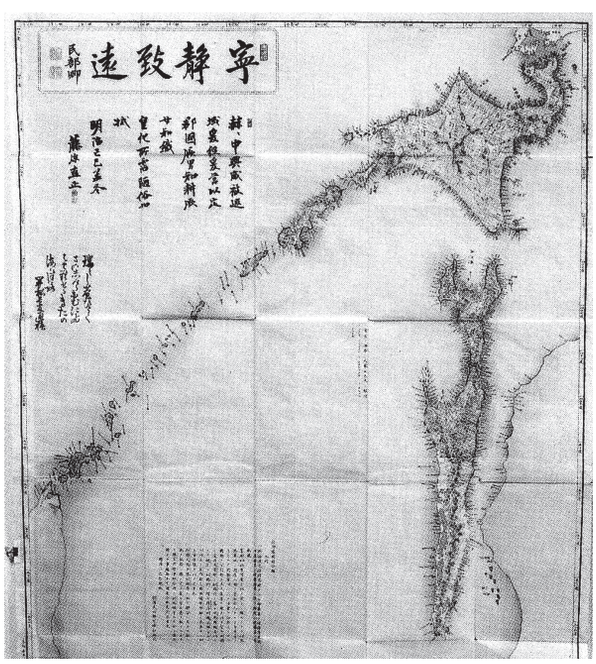
と、札幌を大阪に、対雁を伏見に見立てています。蝦夷地の中心が、松前・江差・箱館だった時代に、武四郎さんは〈奥地の原野〉である〈札幌〉を北の都にしようと考えたのです。

あえて今〈奥地〉と書きましたが、それは「本州から見た」視線ともいえます。ちょっとここで地図の上下を逆さまにしてみましょう。そう……〈北が上・南が下〉というのは西洋から入ってきた地図の見方で、それまでの江戸時代の地図では〈南が上・北が下〉だったのです（風水など気学の方位盤や陰陽学も、南が上になっています）。

武四郎さんが初めて作成した蝦夷地の地図も、箱館などが上……そして、地図の下半分以上が北方の樺太や千島列島として大きく描かれていました。

南北を逆さまにして地図を見ると、なんだか〈その国のかたち〉まで違って見えてくるから不思議です。この視点で北海道を眺めてみると、札幌や旭川がちょうど真ん中あたりです。

もうひとつ。この位置から日本列島を眺めてみると、日本海は大きな湖のように見えます。一時期、太平洋側を表日本、日本海側を裏日本などと呼んでいた時期がありますが、江戸時代は海の荒れる太平洋側に港は発達せず、内海である日本海側を走る北前船によって日本海に面する港は栄え、まさに裏日本の方が表だったのでした。そういう時代の視点に立ってみると、札幌はその文化圏の北端に位置し、またオホーツク文化圏の中心となりうる立地条件を備えていることがわかります。札幌を蝦夷地の中心に……という発想はまさに武四郎さんの慧眼といえるでしょう。



▲「北海道国郡図」松浦武四郎著　明治２年（1869）刊
「北海道」の名が誕生して、一番はじめに政府から出された北海道の地図は、武四郎が作ったものであった。（松浦武四郎記念館蔵）

松浦武四郎（1818～1888）
三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地（今の北海道）を６度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として〈北海道〉のもととなる〈北加伊道〉を含む６案を政府に提案したことから〈北海道の名付け親〉と称される。

文・河治和香　　装画・りんたろう　編集・細山田正人　デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』（河治和香著）が、小学館より好評発売中！